

報告：第9回日韓脱核平和巡礼「政府のGX原発政策のウソにNO! ～若狭宗教者たちのたたかい～」(10月13日～17日)

日本カトリック正義と平和協議会事務局

第9回を迎えた今回の日韓脱核平和巡礼は、今年5月に成立したグリーントランスフォーメーション(GX)推進法を根拠に進められる原子力発電回帰、老朽原発稼働延長の問題を中心テーマに、廃炉が決定した原子炉を含めると15基の原子炉がある世界一の原発密集地であり、また、老朽原発稼働延長問題のまさに焦点といえる原発施設が二つ(美浜原発・1970年稼働開始、高浜原発・1974年稼働開始、残りは東海第二原発)ある福井県若狭湾を、韓国から16名、日本から15名(それぞれスタッフ含む)で訪問した。

講演会

講演会は、巡礼の初日、名古屋教区カテドラルと、2日目、福井県小浜市の小浜市商工会議所を会場に行った。

名古屋では、原発40年廃炉訴訟市民の会共同代表の草地妙子さんと、韓国側巡礼団のヤン・キソク神父(韓国カトリック中央協議会生態環境委員会担当司祭)による2つの講演を行った。ヤン神父から、韓国でも原発をめぐる社会の構造的な問題があり、脱炭素の名目で原発開発が進んでいることが報告され、これらが日韓の共通の課題であることを確認した。草地さんは、GX推進法の本題点の一つである老朽原発稼働延長に関して、問題の実相を説明し、日本キリスト教団名古屋中央教会の会員として、自分が脱原発の問題に深く取り組むようになったその根源に、キリスト教の信仰があることを話された。

小浜では、大島堅一さん(龍谷大学教授、原子力市民委員会座長)を講師に、「原発のコスト問題」と題する講演会を行った。原発は気候変動対策の妨げになっており、気候変動は原発回帰の理由にはならない。しかも原子力発電費、国費投入、事故対策費用などを計算に入れば、



写真1 佐分利小学校校舎の一部

電気料金の底上げにさえ貢献してきた。加えて、原発事業は、問題を先送りにした実現不可能な計画、事業者への手厚い保護、事故責任者非処罰、被害の隠蔽など、徹底的な不正義の上にある。原子力に回帰すべき理由は何もない。

大島さんとは日程の関係で、オンラインでつながることになったが、会場には、悪天候にもかかわらず、若狭湾で脱原発のために活躍される、「原発設置反対小浜市民の会(小浜市民の会)」の皆さんが多数おいでくださった。

訪問地

今回の巡礼での訪問地のうち、特に2箇所、報告したい。

1) おおい町

おおい町は、福島原発事故の翌年2012年7月、さっそく再稼働が行われた大飯原発のある町である。おおい町町議会の野党議員の猿橋 巧さんが、交付金で建設されるさまざまな公共施設を案内してくださった。おおい町は、周囲を山林で囲まれ、若狭湾に流れ込む佐分利川に沿って田畑が広々と続く奥深い地形で、そこに、およそ不釣り合いな斬新なデザインの建物がぼつりぼつりと建っている。その一つ、おおい町立佐分利小学校の校舎には「原子力発電施設等立地地域長期発展対策交付金施設」と書いた板がはめ

込んであった（写真1）。生徒数は現在75名ほどだが、巨大で窓のない体育館が立っており、放射線の侵入を軽減する工法が利用され、事故の際の避難場所に想定されているとのことだった。

2) 泊 朝鮮人難破救出記念碑

立地の関係で間近に近づくことのできない大飯原発を、若狭湾越しに唯一遠望できる地点ということで、「小浜市民の会」の松本 浩さんに泊をご案内いただいた。泊には、1900年1月、韓国船が暴風で遭難したが、村の人たちが助けて介護し、1週間後に遭難者たちを韓国に帰したという、日韓を繋ぐ歴史が残っており、泊の人たちは「海は人をつなぐ 母のごとし」と書かれた記念碑をたて、この歴史を大切に守っている。地元で保育園の園長をしながらこれを絵本『風の吹いてきた村』にし、日本語、韓国語の歌まで作曲してこの普及に努めている大森和良さんが来られ、海を前に皆でその歌を歌った。

出会い～「原発設置反対小浜市民の会」と宗教者の人々

若狭湾に建つ5つの原発施設のほぼ中央に位置する小浜市には、原発がない。1968年以来、原発誘致、原発関連施設誘致に対する反対を継続し、成功してきたからだ。現在この活動の中心にあるのが、若狭湾一帯の心ある市民たちによって構成されている「小浜市民の会」である。

とりわけ、地域に根差す仏教寺院の僧侶たちが、この運動の大きな担い手になっている。若狭湾東に位置する敦賀原発、美浜原発、もんじゅ（廃炉）を案内してくださった、真宗寺院の住職の岡山 巧師は、「原発が差別を作るのではなく、差別の上に原発が建てられるのだ」と語った。若狭の名刹小浜明通寺の住職中野哲演師は、なぜ大都市圏のための電力が、わずかな電力しか消費しない地域でつくられるのか、なぜ大都市圏内で、自前で作らないのか、危険な原発を押し付けるその不正義をどうにも見過ごせなかったという痛恨の思いを語った。また若狭湾西部に位置する高浜原発と大飯原発のあるおおい町を案内してくださった3人のうちの1

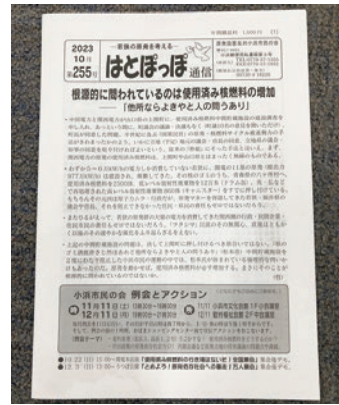


写真2 『はとぼっぽ通信』255号（2023年10月）

人であるおおい町の曹洞宗寺院副住職である尼僧は、電力会社社員による地域の繁栄、交付金などの利益を手放すことができず、原発について硬く口を閉ざす地域住民も、個別訪問して話を聞いてみれば、やはり老朽原発の稼働に大きな不安を感じていると話す説明された。

それぞれに、どうしてこの問題にこれほどコミットせざるを得なかったのかという理由の根源に信仰があり、信仰から湧き上がる強い意志と行動力に触れることができたのは、今回の巡礼の大きな収穫だった。

「小浜市民の会」では毎月、「はとぼっぽ通信」というニュースレターを発行している（写真2）。その最新バックナンバーを、多くの人に読んで、知ってほしいからと、「小浜市民の会」の坂上和代さんが、夜遅く、旅館まで届けてくださった。正義と平和協議会事務局には、いつからと遡ることもできないほど以前から「はとぼっぽ通信」が毎号郵送されてきていたが、これまで、毎日たくさん郵便受けに投函される郵送物の一つ、という認識を持つに過ぎなかった。巡礼が終わり、事務局にいつものように「はとぼっぽ通信」が届き、今回出会った人たちのうちの何人かの名前が書いてあることを確かめた。「はとぼっぽ通信」を編集されているのは、高浜原発を案内していただいた東山幸弘さんである。

今回の巡礼は、「小浜市民の会」の皆さんの惜しみない協力なしには成し遂げることはできなかった。最後に、そのことを感謝して報告を終える。